

小さな学校の戦争

今年(昭和八十一年)は戦後八十年というところで、戦争について知らされ、考えさせられる機会が多くあった。

奥三河郷土館でも「子どもたちに伝えたい『私の昭和二十年八月一日』の記録」と題して企画展が催された。そこでは、多くの方々の証言から、戦争の悲惨さ、平和への思いが浮き彫りにされていた。

企画展では戦火が激しさを増していた時期ということもあり、町外に出て戦禍に直面した方の他に、食糧や物資に関する苦労がよく語られていたように思う。

証言できる方が少なくなっている現状から、企画展で取り上げられた年代より少し前のことが中心となるが、山の中の小さな学校と戦争との関わりを書き留めておきたい。昭和十三年二月、「豊橋教導学校生徒八十名と兵馬四十頭が、三都橋へ一泊」と記録にある。

三都橋小学校閉校記念誌に寄せられた文章に「兵隊さんが大勢小学校に露営した。この時に校庭の桜も多少傷み皆で手入れを行い、先生と五、六年生が移植もした。(中略)

兵馬に踏まれて枯死寸前の桜の苗を一年生の子がもらい学校の土手に植えた。その桜が閉校当時に花を咲かせている」とある。軍の意向の前には、黙つて後始末をするしかなかったのであらう。その前年に新校舎が落成し、十二年度の卒業生が記念に植樹したばかりの桜の苗であった。

三都橋小学校は明治三十五年田峯尋常小学校から独立し、独自の学校として発足した。卒業写真が明治四十三年から残されており、初期のころは欠けている年度もあるが、大正二年度以降、閉校となる平成八年度までは毎年卒業記念として撮影されてきた。しかし、大正十二年度と昭和十九年度だけが欠けている。



卒業写真

掲げた写真は昭和十三年度のもの、後に掲げる寄せ書きを贈った子どもたちである。

卒業生十八名と教職員三名である。全校生徒は七十名と記録にあるが、教職員は校長を含めてこれで全員であった。

この年度まで、ここには写っていない松下先生が、この子どもたちを教えていた。松下先生は昭和七年の九月から約六年間、三都橋小学校に勤務していたが、昭和十三年七月に軍役に就き、この卒業生たちを送り出すことができなかった。



寄せ書き

子どもたちは戦地に赴く松下先生に寄せ書きを贈った。文面は戦意高揚の教育を受けた子どもたちらしさが表れている。

いつものようにして集めら

れたものかわからないが、校長先生が「お達者ですか」と書き添えているので、学校から離れてしばらくして送られたものようである。すでに卒業した児童の名もあり、小さな学校ならではのもののように思われる。



戦地からの手紙

また武昌に駐留する隊に所属することになった松下先生は、子どもたちとの交流を絶やさず、検閲済みの軍事郵便で個人あてにも便りを送っていた。

これは先生と何通かの手紙をやり取りした方が保管していたものだが、子どもたちからの慰問袋や手紙に対する謝礼と共に写真を添えて、現地の気候や風景などの他に、軍隊での活動の様子を挿絵入りで伝えている。

松下先生は昭和十六年一月十九日、除隊し三都橋小学校に戻ってきたが、同月末離職している。離職の理由はわからない。

(設楽町文化財保護審議委員

平松 博久)